「随筆　日中首脳、囲碁で心の距離を縮められるか」

堤　一直
一般社団法人・東北亞未来構想研究所 理事
慶熙大学校アジア太平洋研究センター日本学研究所 首席研究員

日中両首脳に共通の趣味？！

２０２３年１１月の日中首脳会談に関して様々な評価が出ているが、中学校から大学まで囲碁に打ち込んだ私は、両首脳が共通の趣味、囲碁で心の距離を縮められたのか気になった。

日本外務省によれば、本会議は同時通訳とはいえ約６５分。限られた時間の中で、関係のない話をする余裕があったのかと思う方がいるかもしれない。だが、せめて会談前の冒頭会見や会場への移動の際などに少し趣味の話をしてもよかったはずだ。

習近平主席の趣味は囲碁だそうで、さらにかつての世界最強の棋士聶衛平（Nie Weiping）氏とは若い頃からの友人だったそうだ。一方、岸田首相の趣味も実は囲碁で、ウクライナのゼレンスキー大統領にしゃもじを贈る心遣いができるなら、習主席に日本最強の井山裕太棋士の直筆扇子を記念に渡してもよかったのではないか。

習主席が囲碁を打っている映像は中国のネットを探しても見つからなかったが、２０１７年１２月に韓国の文在寅大統領が訪中した際、両国首脳が碁盤を囲んでいる右上の写真が興味深い。実は、文大統領の趣味も囲碁であり、韓国での対局の様子からも囲碁好きであることがうかがえる。

中韓外交の潤滑油として

だが、日中両国の間で２０１２年１１月の習主席就任以降に「日中首脳が碁盤を囲む姿」は筆者が知る限り見たことがない。日本で岸田首相以前に囲碁が趣味の総理と言えば菅直人元首相であったが、菅・習両首脳の在任期間は重なっていない。

一方、中韓では２０１３年６月の朴槿恵元大統領の訪中時に、習主席が中国囲碁界の若手強豪常昊（Chang Hao）棋士を紹介し、かつ中国棋士の活躍について語ったと言われる。翌年習主席が訪韓した際に今度は、朴元大統領が韓国の螺鈿が施された高級碁笥、さらに韓国最強と呼ばれる李昌鎬棋士を習主席に紹介したそうだ。

試しに韓国の著名サイト Naver で「朴槿恵」、「囲碁」、「趣味」と韓国語で入力し、検索したが朴元大統領の趣味が囲碁であるという情報は見つからなかったが、それでも、彼女は中国の囲碁外交に応えたのである。さらに、先ほど紹介したように、この中韓囲碁外交の流れが朴元大統領から、政治的立場が大きく異なる文元大統領の時代にも続いていることが興味深い。

中韓関係は、特に朴政権時に韓国での弾道弾迎撃ミサイル・システム（ＴＨＡＡＤ）配備を巡りぎくしゃくしたこともあったが、２０１５年の１年間で韓国のアジアインフラ投資銀行（ＡＩＩＢ）加盟及び中韓自由貿易協定締結が実現したことは看過できない。

故安倍総理、囲碁外交を展開していたならば…

ここで、日中間の囲碁外交を見ていくと、習主席就任以降の日本の首相は野田、安倍、菅義偉、岸田の４名であるが、野田首相は習主席の就任から１か月後に辞職しており、また菅首相の在任中はコロナで往来が滞っていた。それで、安倍首相が、日中囲碁外交を展開していればと惜しまれるのである。

安倍首相は２０１８年１０月２５日～２７日まで訪中し、一方習主席の訪日は翌年の６月２７日～２８日の２日間である。後者の目的は大阪でのＧ２０サミット参加であったが、２７日夜に安倍首相は習主席と会談し、夕食も共にしている。

筆者は Google Japan で「安倍」、「習近平」、「囲碁」と検索してみたが、囲碁外交に関連

する情報は出てこなかった。安倍首相はやはりゴルフ好きで、囲碁は嗜まなかったようである。だが、下記画像から明らかなように２０１６年６月に安倍首相は井山棋士を顕彰しており、井山棋士は安倍首相に直筆の扇子を贈っている。

ならば習主席が訪日した際に扇子を渡すか、または井山棋士を紹介してもよかっただろう。はたまた、このとき当時の岸田外相を「趣味は囲碁なのですよ」と習主席に紹介していたならば、現在の日中首脳間の仲も少しは違ったかも…というのは筆者の考え過ぎだろうか。

安倍首相は、２０１４年４月のオバマ大統領訪日の際に彼の好物である寿司でもてなしたことがあり、２０１６年１２月のプーチン大統領訪日時には自身の選挙区である山口県長門市の老舗温泉旅館で会談し、「東方美人」という日本酒を振舞ったこともある。

安倍首相は、まさに本題以外の飲食や趣味で対話の場を和ませることに長けた外交上手だったと思う。首相在任中、あえて中国に対し距離を置かざるを得なかったならば、退任後に囲碁外交を展開する機会があったかもしれない。悲劇の最期が悼まれる。

今後岸田首相が習主席に対し「囲碁外交」をしたとしても、日本人拘束、福島原発からの処理水、そして台湾問題等の懸案を抱えた中で融和的な態度を見せてよいのかという非難の声が予想される。

だが、国交の無い時期でさえかつて日中、米中の国交回復に卓球も貢献したという「ピンポン外交」はよく知られており、飲食の好みや趣味が首脳間の距離を縮めた事例は多く、本

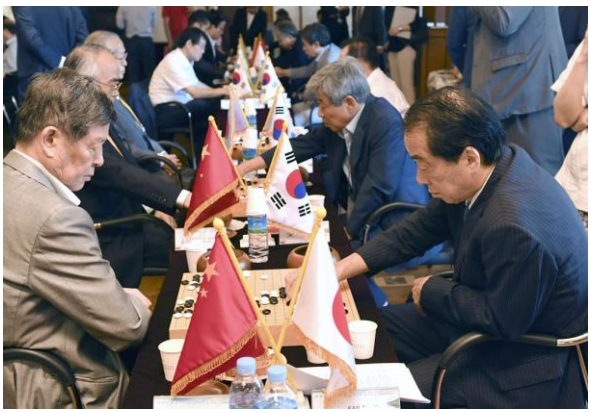
題以外の話の大切さは無視できない。例えば、企業同士の困難な交渉であっても、休憩中に自販機や洗面所で互いの社員が雑談するだけで雰囲気がほぐれ、交渉が進むことはある。

政治家としての顔だけでなく、人間としての顔も

日中間で囲碁を通じて距離を縮めようという気運はあり、昨年５月末に開かれた中国文化センター主催の第１回日中囲碁文化祭および日中囲碁サミットがそれである。東京中国文化センター、友伝株式会社などの共催とされているが、岸田首相からの提案はあったのだろうか。そうであったとしても、一言祝電があれば良かっただろう。当時８５歳の福田康夫元首相が高齢を推して参席したのだから、なおさらそう思う。在日中国大使館のホームページに福田元首相以外の日本の政治家の氏名が載っていないのは、やはり寂しい。

とはいえ、日中の両首脳が２０２２年、２０２３年と１回ずつ会ったことは幸いだった。日本の政局は読めないが、今後もし両者が会う機会があるならば、そのとき岸田首相が習主席に井山棋士の扇子を渡す場面を見てみたい。「大局的な視点から両国の課題を解決していきせんか」と一言付け加えれば、なおよいのではないか。「大局観」という言葉は囲碁から来ているのである。

この２０２３年１１月には公明党の山口那津男代表も訪中しパンダの貸し出しを要望し、民間交流維持へ向けての努力がなされた。下記写真のように２０１８年８月には日中韓の国会議員の間で囲碁交流が行われたこともあるが、右手前には菅直人元首相も見える。碁盤を挟んで各国の国旗が並んでいる光景が感慨深い。



次は首脳間交流の出番である。日本と中国、それぞれ体制は異なり、今の両国関係は様々な困難を抱えてもいる。しかし、だからこそ一層、両国首脳が「政治家としてだけではなく、人間としての顔を見せ合うこと」が必要ではないのか。そのとき、紀元前の中国で産まれ、朝鮮半島、日本でも愛好された囲碁で「局面を打開」して欲しいと筆者は切に願っている。

以上